

ば、世間恋しきの現れであることである。独居をさびしと感ずるのは、人に逢いたい心を阻止するところから生ずる。真に人に逢いたくない人には、独居は決してさびしくない筈である。(中略)この意味からすれば、最も世間人に背をむけているかに見える草庵人こそ、最も美

伊 良 子 清 白

一、清 白 と 詩

—— 書翰を中心にして ——

河井醉茗、横瀬夜雨と共に、文庫派の三羽鳥といわれた伊良子清白、なかでも彼は後に日夏耿之介氏が「泣有二家に雁行せる逸才で、鉄幹の措辞をも凌ぎ、泡鳴の粗笨に遠く卓れて、林外の形式美を遙かに超越した……稀に見る天稟の技能の所有者」(『明治大正詩史』巻ノ上四四三頁)と、称賛の辞を惜しまなかつた程の詩才を有していた。しかしながら、七十年にわたる生涯を通じて、彼が詩作活動を行なつた期間、明治二十七年六月「少年文庫」六月号に「朝の小蝶」を發表したのを皮切りに、明治四十年「文庫」才三十四卷才五

しく世間人と抱き合っている人だと言つてよいであろう。(石田吉貞著「中世草庵の文学」)
これは、西行はじめすべての草庵人の心を的確にとらえ、分析している言葉といえよう。

木 村 喜 代 子

号の「七騎落」を最後として僅か十三年間に過ぎない。そしてその間にはたとえば京都府立医学校(現在の京都府立医科大学の前身)卒業の年(明33)のように文庫への發表作品が全くない年もあるのである。しかも、その十三年間を彼は詩作にのみ費したのではなく、生活の基礎を本業の医業に置いていた。その十三年間というものは、彼にとつて生活と詩との間の彷徨の期間だともいえる。

近年、みず書房より刊行された河井醉茗夫人島本久恵氏の著書「長流」(全八卷)には文庫派詩人の群像が描かれているが、そのうち主に四卷・五卷には清白について詳しく書かれている。それを讀むと、詩への情熱に燃える清白と、生活に忠実な清白が入れかわり立ちかわり現われてくる。そう

いう清白を島本氏は、「漂泊の人」という代名詞を以て呼んでいる。いまし、彼の「漂泊ぶり」を辿つてみよう。

明治二十八年「文庫」才一号に發表した短詩五篇長詩一篇に對して、残星が、「詞意共にいみじき作と見たれども先人踏襲の跡あるは、少しく憾むべき事ならずや」と評した。また同誌才二号に發表した詩四篇に對しても残星が「老練服すべし、又曰く毎度ながら君が他に私淑するあるを惜む、堂々たる六尺の男子豈に永く他が胯下に堪ふべけんや」との評を下したが、清白はそれに對して「文庫」才三号に、「残星ぬしの評言に付きて憤激する所あり乃ち一詩を作る」と前置して、「暉造の詩」を發表している。その詩の五、六、七連をここに掲げよう。

諸君しばらく待ちたまへ
暉造これより奮ひ立ち
天地の声をふところに
登りて見せむ魁に

血あり肉ある暉造は
日本おのこの一人なり
剣をぬきてうそぶけば
風に声あり研くべし

研き／＼てひからずば
たふれて止まむされこうべ
されしかうべを見給はゞ
かの暉造がかばねなり

この詩には詩への焦燥と発奮を制しかねている若き清白の姿が歴々と現れている。が、その後、京都の医学校に在学中、河井醉茗に次のような手紙を書いている。

親愛なるわが友よ、われは君の懇篤なる忠告によりて豁然開悟するところありき。君よ君よわれは永久に詩を廃せざるべし、われの詩才なきはいふもはづかし、されど、詩才なきに失望して詩を廃するがごとき愚をなさざる可し、われは自己の力に安んじ悠々として詩にあそぶこと夫れ山水にあそぶがごとくならむ、われはます／＼刀圭の業に勉むべし、詩は以て其余暇の雅具に供せん、あゝわれはおろかなりし、他人と競争せんとして其力足らざりしをかなしみしは、詩人たらんと欲して其才なきをかなしみしは、今や煩惱のこゝろをいでて菩提のさかひに近づくを得たり（後略）

ここには最早、あの若き清白の姿は見られない。しかし、彼はこの書簡に於いていうように詩を「余暇の雅具に供」したのであらうか。否、彼は文学を専攻するため上級学校へ進もうとし、そのため父と争つたこともあり、この手紙を書いて

後、明治三十三年一月には、遂に文学に専念するため家業の医業を継ぐことを弟の道寿に譲り、上京した。尤も、その時も、生計の道は飽くまで医業に求めていたのであるが……。

彼は古典より現代に至る小説、翻訳もの、新体詩などあらゆる文学に関心を寄せている一方、実際に京都在住時代には『少年文庫』を主として、『よしあし草』『青年文』『もしは草紙』などに作品を寄せ、上京してからは『明星』の編輯に携わっている。彼はまたよく詩を論じたようである。例えば、明治三十三年一月三日の浜寺（大阪府）の鶴の家に於ける『よしあし草』の新年会の席上、彼は鏡花の幻覺を取り上げ、それを医学上から立論して、それはのちの語り草となつたりしていることや、また同年二月二十一日付鉄南宛書簡は彼が与謝野鉄幹と、万葉や業平、西行より新体詩に至るまで議論したことを伝えていること、あるいはまた、その年の八月十六日には醉茗の本郷の下宿で溝口白羊と会い、白羊は抒情詩、彼は叙事詩の立場で詩を論じているなどである。

しかし、明治三十七年頃より、清白は父の浪費や病院事業の困難という事情の下で、だん／＼文庫から離れてゆく。同年八月二十一日付の醉茗宛の手紙は、旅先の米子より送られたものであるが、そこで彼は詩から遠のきつつある我が身の寂しさを語っている。

（前略）近頃の心の悶えは一入に御座候、かかる価なき生活は或る罪惡をつくりつつあるにひとしく候、（略）

職業は授けられたるものに候へば、之を避くるは神の意志に背くものに候、ソレ故小生はいかにしてか心の安きを得んと苦しみ居候、（略）文庫にも怠り居候はさきにも申し上げ候通り心の衰へたる為に候、若うして力無きは笑ふべききはみに候（後略）

しかしそれから半年後、明けて明治三十八年初頭には『月光日光』『漂泊』を創作し、九月には『淡路にて』『戯れに』『花柑子』『かくれ沼』『安乗の稚子』を『文庫』に発表する。これらはすべて、『孔雀船』に収められた彼の代表作である。ちょうど六月に彼は結婚しており、彼にとつてこの年は会心の年であつたに違いない。そしてそれまでの仕事の集大成という意味で、彼は二百編近くの作品の中から十八篇を自ら厳選して、詩集を発刊する計画をした。それが明治三十九年五月に刊行された、彼にとつて唯一の詩集―彼の名声を高めたのはこの一冊の本である―『孔雀船』であるが、彼はその刊行に先立ち、四月二十九日、在京詩作生活に終止符を打つて島根県の浜田へ細菌検査所検査主任として赴任する。そして翌年七月の『七騎落』の発表を最後に、完全に詩壇を去つたのである。

そのことについて、清白を最もよく知る醉茗は、清白が東京を去つたのには、家事の都合や一身上の方向の為もあつただろうが、同時に一切詩を作らなくなつたのは何故か、として、その理由は清白自らも語っていないので、臆測によるし

かないが、一つは三十九年から四十年にかけて詩壇に大動揺があり、酔茗が「文庫」を退いて「詩人」を創刊することになつて文庫派が解体の形となつたこと、そして一方には続々と現われる新進の詩人たちの文語詩を退けて口語自由詩を推進させようとする運動が勃興し始め、文芸界は象徴詩も抒情詩も自然主義思想の波に浚われんとする勢いだつた。そういう時に根強く伝統文芸の精神を抱えている清白が創作意欲を失なうことは当然考えられるのであり、決定的に清白をして詩筆を折らしめたものは「孔雀船」が何等の反響も起さないうことであつたのではないかと述べているが、恐らくこれが妥当な説ではなからうか。実際、酔茗が四十年に「文庫」を去り、詩草社を興した時に、清白は心穩かならざる状態であつたらしく、早速三月二十七日付で夜雨宛に反対の旨の書簡を送っている。そしてまた、酔茗からの詩草社に名を連ねるようとの働きかけに対する断りを、「主唱者の内に小名御加へ被下候へども、微力正に当らず御辞退可致之處」と書き送つてゐる。この書簡を書いている時、清白は詩界との訣別を決意しつつ、永年志を同じくした詩友を失なうことに對する寂寥の思いに身も震えんばかりだつたことと想像させられる。その思いを耐えて綴られたであろう「微力正に当らず云々」との文面は、「どんな時にも彼はさまざまの世事にとらわれ、自ら思いを苦しめて、そうして一生の間人に對してはなめらかにものいうことを願い、ペンを取つてはなめら

かにもの書くことを願うて、いつもそれを果し得ぬ思いに悩んだ」(『長流』才四卷一四七頁)と島本久恵氏によつて伝えられる清白像を如実に語るものである。しかしながらその清白も、四十年五月十七日付酔茗宛書簡に於いてはかなり憤激の情をにじませている。その書簡というのは酔茗がまだ「文庫」の記者の席にあつた時、詩集の評「鏡塵録」と訳詩「七騎落」の二作品を「文庫」に投稿していたが、どういう訳か予定していた五月号に載らなかつた。「文庫」の中にも日々自分の居所の失なわれていくのを遣り切れぬ思いで見ている清白には、その事件は若手陣の旧文庫派一掃の手始めだと受けとれ、その旗頭とみられる人見、原田という人物の名前のある「詩人」才一号に彼らと名を連ねることをしたくないから原稿を断るとの主旨のものである。問題の「七騎落」はその年の七月に「文庫」に発表されたが、清白はこれを最後に再び「文庫」に姿を現わさなかつたのである。才三者からみれば、こういつた事柄はそれほど深刻なことではなく、或いは清白の狭量を笑う人もいるかもしれない。しかし少くとも芸術を志す者にとつては、その作品が無視され、発表の場を失なうということが大変な苦痛であるというのは間違つてゐるであらうか。その後、彼が酔茗に宛てた手紙には、彼のそういう苦痛が溢れんばかりに綴られてゐる。

文庫が事実上其長き寿命を終りたる事は余に取りて一大苦痛なり、何となれば余の如き鄙遠の地にすみ、何等他

に慰藉なき寥寂の境遇に在るものは、文庫を以て殆んど唯一の精神的伴侶とせる観ありき、今や之を失ふ、到底大兄に於ける關係を以ていふべからず、余は今日以後詩の故郷を逐はれたる一箇の漂泊の孤兒のみ、(後略)

私はここで、清白が二十八年に残星の評に立腹して作つた「暉造の詩」を思い出さずにいられない。そして彼がそこに「登りて見せむ魁に」と詠つたところの「魁」への才一步を踏み初めた時、このような形で詩界を去つたことが痛ましく思えるのである。そして彼はあれほどの発奮をみせながら、何故詩一筋に生き得なかつたのか、という疑問が湧いてくるのである。それほど芸術の道が厳しいものであるということはある。それほども無いだろう。しかし、彼の場合には、それにも増して「おいたち」によつて形成された彼の「人生觀」に根ざすものがあるように思われる。即ち、大正十五年の「喪き母のみ霊へ」という手記に書かれたようなおいたち——一口でいうなら、家庭を知らず他人の中で育つた——を通じて、彼は幼少年時にして人の世を渡る難しさを身を以て会得してしまつたのであろう。彼は無意識のうちに冒険というものを忌み嫌うようになつていたようである。文学者には必らず付き物ともいつていい恋愛問題にしても、彼に關しては、「長流」にたつた一カ所書かれていただけである。しかもそれは次のような酔茗宛の書簡に於て語られてゐるに過ぎない。

(略) すぐる夏のあひだは申すもはづかしき一女子の感

情に制せられて卒業の時期を謬り、女子の家には信用を失ひ、ために嚴父の面目を汚瀆し、凡百の俗事之を纏綿して潰爛瓦礫又収むべからざるの境遇に陥りぬ。こはわが処世の才に拙きはもとよりなれども女子の声色に惑溺したるの嘲は免れがたくぞ思ふ。われは戀愛の神聖なるを知る、されどこは絶対的に考ふる時のみ、もし種々の事情境遇の下に戀愛を遂行せんとするものあらば、わがごとく身を破らざるもの少からざらんや、(後略) (二十九年前、傍点引用者)

勿論、戀愛というものに対する一般の考えは當時と現在とでは随分違つてゐるにしても、これを読むと私には彼が詩人であつたということが不思議にさえ思えるのである。だが、彼が詩人となり得たのは、紛れもなくおいたちのお蔭であり、おいたちは必然的に彼を詩の世界に赴かしめた。その条件の一つとして、彼の母に対する強い思慕の情があげられると思う。

彼は十九歳の時、初めて酔茗宅を訪れ、それ以後、酔茗と親交を結ぶようになるが、その訪問にあたつて書いた手紙には、母を慕う氣持と、同じく両親を失くした酔茗への同情の氣持が切々と綴られてゐる。

ゆくりなくも去年七月の文庫をよみはべりしに、君が物したまひし松の烟といへるを見当りて、見もてゆくうちあはれいと深し、あゝ君は父上も母上もおはせぬとか、

遠き千里の旅の空それだにたらちねはこひしたはるゝを、ましてや幽明界を異にし、帰らぬ旅に鹿島立ちたまひけむたらちねの上、あゝ泪といふもおろかなり、おのれは君の物したまひし文をみてしばしなきしづみぬ、げに人の上のみにあらざりけり（後略）

二歳の時母を失なつた彼は、終生、母に対する思慕の情を忘れることがなかつたようである。彼の代表作「漂泊」には、そのような情が見事に表現されている。

だが、それにしても詩壇は清白にとつてあまりにも冷淡であつた。嚴選に嚴選を加えて世に問うた「孔雀船」も黙殺された。彼はこのことを以て、詩人としての自信を失なつたというよりは、自分の作品を評価してくれるものがない詩壇に大きな失望を感じたに違いない。「詩の故郷」を逐われた彼は、「心の故郷」を求めて漂泊をはじめた。

四十一年、彼は浜田から大分市に移り、四十三年には台湾へ渡る。そしてそこで彼はボルネオ渡航を夢みるが、それは果されず、大正七年に再び京都へ移り、大正十一年には三重県鳥羽の小浜へ行く。そしてそこが遂に彼の終焉の地となるのである。その地で彼は昭和七年から十七年まで、宮瀬規矩夫氏主宰の短歌雑誌「白鳥」の指導者として選評を行ない、毎号作品も發表した。

「りてえやばにかえ」才五号（昭和三十七年十月一日發行）には杉谷寿郎氏によつて昭和十二年より十六年までの清

白の書簡が紹介されている。その書簡の宛先人はすべて浜地文平氏（現代議士とある）であるが、そのうち昭和十二年五月五日付の書簡に書かれている「謹呈五首」のうちの一首は青年無享多情多感といふものありつきつめていへば政治は詩なり

というものであり、また昭和十五年六月三日付のものは次のように伝えている。

拝復

「終生、芸術と握手し得ない人がある。この類ひの人は眼前の現実より一步も外に踏越え得ない人で殊に科学者、政治家、実業家などが多い。これらの人々は社会の物質的進歩に貢献し得る深味ある人生を創造することは出来ない。殊に芸術と創造力とはそこに至深至密の關聯がある云々」

これは唯今うけとつた小生の友人京都府福知山医師会長佐藤総吉氏の人生俳観の一項です。これを謹んで賢台の坐右に呈します。まことに政治と芸術は其奥所に於ては一つと存じます。

これら二つの書簡に共通して述べられている思想、即ち政治は詩であり、芸術であるという思想は、今日のように極度に政治の墮落化と不信感の強まつた時代に生きる私たちには、あまりにも理想的であつて、大きな距離が感じられるのである。が、それはともかくとして、この思想が清白によつ

て語られているということは意味あることと思う。一つは概括的ではあるが、彼の政治観——勿論それは当時の常識的観念だったかもしれないが——を示しているということ、他は、彼が詩壇を去つてのちも詩を忘れられず、そして芸術を愛せずには居られなかったことを示していて興味深いのである。そしてその政治と芸術（＝詩）という二つの概念を共に深遠で永久なものとして捉えているということは、彼が本質的に詩人であつたことを物語つていると思う。酔茗は彼のことを「美の欣求者」と呼んだが、それは彼を呼ぶに相応しい表現であると思う。

報われず詩壇を去り、心の故郷で自然の美に浸っていた彼は、大正年間に於て、日夏耿之介をはじめ、北原白秋や西条八十などから称賛の辞を浴びた。だが芸術家の幸せとは、報われるということよりも、自己の志す芸術に没入することが出来るということではないだろうか、私には思われるのである。

注 (1) 滝沢秋暁の号。秋暁は長野県の人。上野美術学校

に通い「少年文庫」の編集をしていた。引用の文は「長流」記載のものによる。

(2) 本名で、当時の号でもあつた。

(3) 「長流」才四卷二二〇頁

(4) 堺の寛応寺の嗣子で、本名河野通該、当時錦西小学校の教師をしていた。「よしあし草」の同

人。

(5) 次節に書簡掲載

(6) 「長流」才五卷三九頁

(7) 河井醉茗著「詩と詩人」二九二頁

(8) 古川清彦「伊良子清白評伝」（『国語と国文学』昭和二十二年八月号）参照。

同文によると彼は、二歳で母を失ない、乳母に育てられ、七歳の折り医者である父と一担別れ、八歳から父とともに「漂泊」の生活を送っている。

(9) 当時、鳥羽町の朝日新聞記者であつた。

(10) 河井醉茗著「酔茗詩話」一九六頁

なお、引用した書簡はすべて、島本久恵氏の「長流」才四卷、五卷より抜萃させて戴いた。また、詳しい年代については楠井不二氏の『近代文学資料研究』清白の年譜（国文学—学燈社刊—昭和三十六年七月号一三四頁）を参考にした。

二、清白と『明星』

清白が初期の明星編集に携わり、鉄幹、晶子をはじめ、明星派の人々との交わりをもつていたことは「酔茗詩話」などによつて伝えられている。また、「明星」を通じて、私達は清白と「明星」との接触がどの程度のものであつたかを知ることが出来る。

『明星』創刊号（明治三十三年四月一日）の二頁には、當時の新派画家一条成美氏と共に『明星』の編輯に助力することになったとの紹介が載せられている。それより約一カ月前に、清白は『明星』発行の計画を鉄幹に聞き、それに期待を寄せていた。三十三年二月十一日付の鉄南宛の書簡はそのことについて述べている。

昨夜与謝野君訪問、快談数刻、或は万葉を論じ、或は業平西行を議し、新体詩の詩形より和歌の機運に到るまで獲る所尠らず候ひし、氏は今度月刊雑誌発行の計画の由にて、内容は律語の創作、談理に加ふるに外国文学の評釈を掲載せらるゝ趣に候、就中久保天随の支那俗謡の評釈、佐々醒雪の端唄の講義は面白き品物ならんと渴望せられ候、（傍点引用者）

しかし、実際には『明星』を繰つてみても、彼の作品は非常に少ない。私の探し得た範囲では才一号に短歌五首、才二号に短歌三首、才六号に詩『海の墓』才七号に短歌六首、才十四号に詩『郭公の歌』才十五号に詩『夏祭』才十六号に詩『柳の芽』及び小評『落梅集』を読む、であつて、これ以後には見あたらない。作品年譜を見ると、この時期に於ては『文庫』への発表の方が圧倒的に多く、作品についても『文庫』に発表されたものの方がすぐれていることは、清白自ら当時『文庫』に発表された作品『海の歌』（『孔雀船』では才四篇のみをとつて「島」と題している）と「駿馬問答」を

『孔雀船』に選んで掲載していることから言えると思う。

島本久恵氏の伝えるところによると、「とりわけ『明星』は創刊の浅いことでもあり寄稿家の中へ『文庫』のめばしい人々をならべることになかり心を用いていました。文庫派としては、酔茗はじめずしものや、鳥水、秋暁その他鉄幹の趣旨に賛意を表して作品での協力はするが、社内の会合にまで顔を出したのは始めの内で……」（『長流』才五卷九二頁）あつたそうだから、清白の作品がごく初期の号にしか載つていないのも当然のことであろう。尤も、『明星』には清白よりもむしろ酔茗の作品の方が多く、また後に及んでいる。そしてこのことと対照的なのが夜雨で、夜雨の作品は一篇も見つからない。そのことと直接関係があるかどうかは分らないが、『長流』には次のような事が書かれている。

与謝野晶子がまだ鳳晶子であつた時、彼女が夜雨が尙僕病であることを聞いて「まあ、氣持が悪い」といつたらしい。夜雨の耳にこのことが入つたかどうかはともかくとしても、才三者である清白の直ちに知り得たであろうことは容易に想像できる。とりわけ夜雨と親交があり、医者としても彼の病氣については細心に注意していたらしい清白は、彼特有の潔癖感でいて、晶子を女王のように取り扱ふ『明星』に対して才に疑念を抱くようになったのではなからうか。だが、それは飽くまで推測であつて、このような人事的な面を除いて、詩に於いて、主情的な色彩の濃い明星風には満足できな

かつたであろうことは推察できる。

それでは、彼と『明星』との關係を追求することは無駄であろうか。彼は明星からいかなる影響も受けていないと断定出来るであらうか。私は否と答えたい。いや、正しくは直接的な影響は受けていないと言ふべきであらう。しかし、彼がこの時期に『明星』と接触したことが、彼の詩作態度や活動に於て何らかの変化をもたらしているのではないかということについて考えてみたいのである。先ず彼の作品を年代順に概観した時、そのリズムの変化が比較的明確である。そこで私はこのリズムの変化と『明星』との接触とが何か関連がありはしないかと考えてみた。

三十三年ごろの彼はまだ模索の時代であつたとみてよいと思う。才一に當時の作品にはまだ彼独自の詩形が定められていない。彼の作品中で秀作と云われるものは、七五調四行ないし五五調四行であるが、これらはもう少し後の作品であつて、當時のものは、七五調を採つていても破調の多い長詩が多く、内容的にも駄作といつてよい。

當時の詩壇に於いて基調をなすリズムは七五調であつた。そしてまた當時の詩人の共通の課題の一つは七五調からの脱皮であつたといえる。泣菫や有明の詩を年代順にみると、両者共に三十四、五年から八年頃までの間に様々の詩形を試みて、七五調からの脱皮を目指していることが分るが、清白もこの当時、盛んに詩形に変化を求めていたと云える。そのリ

ズムの変化の様子について述べると次のごとくである。

三十三年頃までの初期の作品は、當時のリズムであつた七五調をとつてゐるが、三十四年頃には調子が全く變つていて、『南の家北の家』や『駿馬問答』などその著しい例である。ところがまた、三十四年に『明星』に發表した三つの詩はすべて七五調四行であり、その形は三十七年の『海の声山の声』まで正確に守られてゐる。そして三十八年になると、『月光日光』を皮切に續々と秀作が發表されたが、それらは殆んどが五五調、あるいは五七調であつて、四十年の五七調が最後のリズムとなる。多少の例外はあるにしても、彼の詩形は以上のような変化を辿つてゐる。

今ここで問題にしたいのは、三十四年を境として彼の詩形が七五調四行に固定されたことである。明星以前に於いても勿論一般的リズムが七五調であつたし、彼も三十四年までに七五調の詩を作つてゐる。が、前述したように以前の作品には破調が多く、以後の作品とでは同じリズムでも明らかにその違いを感じさせる。そして注意すべきは同じ三十四年でありながら、『文庫』には他のリズムのものを發表し、同時に『明星』には七五調の詩を發表しているということである。ということは、彼が『明星』の基調となつてゐる七五調という調子を意識し、『明星』には明星調のものをという意識が働いてゐたといえる。しかしそれが單なるグループ意識や形式的な段階で受け入れたのではなかつたということは、その後

の作品がはつきりと七五調四行の形を保っているということが証明している。それでは後の七五調は明星調であつて彼はそれを継承していつたと云えるのであろうか。否、「明星」は彼に七五調四行という詩形をとらせるきつかけを与えたまでであると思うのである。

私は文学研究に於いて、影響論とか比較論とかを述べる場合、論議の中心の対象となるものは内容であるべきだと考える。従つて、今の場合も、清白の詩想になんらかの形で「明星」の面影を認め得ないだらうかと幾度も作品をよみ返したが、私の鑑賞力ではその微妙な面影を把握し得なかつた。ただ私には

甘き泉に酔ひぬらん

若き泉に酔ひぬらん

酔ふ恋ならば美しく

瞳の色は輝かむ

という一連で始まる「柳の芽」という詩が清白のものにしては少し主情の勝つたという点で僅かにその役目を果しているようなものとして気に掛かるのである。だが、それは生來清白の体内のどこかに潜んでいた浪漫的な性情が「明星」という雰囲気の中で、刺激されて発散したのかもしれない。しかしこの詩も實際は、恋を謳歌しているのではなく、恋に溺れることへの自肅の念が根底に流れていて、やはり自己を客観視しようとする清白らしい作品というべきであらう。

序でながら「明星」に掲載された作品では、詩よりもむしろ短歌の方が多い位であるが、その短歌に於いてもまた彼の独自性が窺えるのである。才一号に鉄幹と共に鶯の死を歌つた短歌が、並んで掲げられている。それらはすべて、取り立てていうほどの作品ではないと思うが、二人の歌いぶりの違いが示されていて面白いと思う。そのうち一首ずつを次に掲げてみよう。

梅が香のほのかにかよふ氣息^{いき}しあらば妹が乳^けの氣にあたたましを

与謝野鉄幹

ひともの羽もみださでをはりたる鳥の心のあはれるかな

すずしろのや

両者を比べると、清白の歌には鉄幹のそれのように艶なひびきは無い。そして鉄幹が自己の感情を中心に歌っているのに対して、清白は先ず冷静に客観的に鶯の死を見つめている。そしてそこから受けた感動を「鳥の心のあはれるかな」と正直に吐露しているのであるが、この時の「あはれるかな」という感慨は、もはや鶯に対してのみにとどまらず、生物一般の「生命」に対する感慨にまで拡大されているように思う。そのためか鉄幹の歌よりも、思想的に深いものを感じさせるようだ。「明星」に発表された範囲でいえば、清白の歌は左程上手だとは思われない。しかし、彼の歌には

平明ななかにも知性が感じられて、濃厚で美麗を尽くした歌の多い『明星』の中では却つて、清涼剤のような感を受ける。しかし、前述したように彼は晩年短歌雑誌『白鳥』の指導者として最後を飾る文学活動を行なっているが、その技能はやはり『明星』との接触の中で培われたものであらうと思ふ。

芸術の価値が形式でなく内容で決定される以上、内容をより克明に探究してゆくべきであると考えるが、詩、特に當時のように定型詩に於いては、リズム（形式）の重大性は内容のそれに劣るものではないと思う。というよりも、この場合はリズムと詩の内容とは不可分の關係にあり、リズムは内容を規制しがちだったのであらう。その点について清白自身の考えはどうだったのであらうか。『明星』十六号（明治三十四年十月）に書かれた彼の短評「『落梅集』をよむ」の中には次のように述べられている。「七と五との日本人の声調に最も適してをることは歴史と實際とが早くから証明はしてゐるが、其外の調子は詩として不都合なものであらうか乃至は律格の自然に任ずる長短不定の句法は、まだ／＼時勢が早いのであらうか。これは言語学と、生理学と、音楽と歴史と、さまざまの方面から研究をせねば、容易に決定し難い問題であらう。しかし詩人は進んで異調の創作に従事し、どのくらゐな範圍迄、詩形を広めることが出来るか試みて貰ひたいものである。（略）殊に長篇の叙事詩（乃至は叙情詩、しかし

叙情詩にはそれ程は感ぜぬが）等は、種々の調子を用ゐなければ、音局面の変化に乏しいのみならず、詩の内容を十分に發展することが出来難いと思ふ」。實際、彼は叙事詩を多く書いてゐる。だから以上述べたようにリズムに変化を求めたのであらう。そしてその変化の流れの中で重要な時期がちょうど『明星』との接触の時期と一致しているのである。

次に内容の点で少し述べるなら、彼の詩の特徴のうち重要なものである、象徴性と神秘性という二点について考えてみたい。

彼は三十六年後期に、ハイネやウーランドの訳詩を続々と発表しているが、この訳詩の時代を通じて象徴的手法を摂取したといえるであらう。彼は医者であつたから、独語に通じていたことは勿論であらうが、明治三十五年四月に独逸協会学校独逸語専修科へ入学、更に九月東京外国語学校本科独逸語学科へ入学している。楠井不二氏は、これは独逸留学の宿望を達成する下準備と考えられると述べておられる。私はそれに加えてもう一つ、独逸詩を学ぶという目的があつたように思う。當時の『明星』には、毎号、内海月枝による「独詩評釈」が載っているが、そこで採りあげられている代表的詩人は、ハイネ・シルレル・ウーランド——尤もそれらは當時の独詩人の代表者であつたからだが——などであることをみると、この評釈が清白の独詩への接近を誘発せしめたとも考えられる。そしてその訳詩の時期を通過したのちの作品群つ

まり三十八年度を頂点とする作品は象徴的手法が著しく目立つし、その客観的叙事的な清白詩の特徴がこの時期になつて明白にみられる。そして詩のリズムもまた内容に適合した彼特有の五五調をとつてゐる。

次に神秘性について考えると、彼の作品中三十五年頃から以後の作品には、題材の相違にかかわらず一貫して怪異で、神秘的な香りが漂つてゐる。その代表的なものは「月光日光」「五月野」「不開の間」「鬼の語」などであるが、これらに漂うローマンティックな鬼気については、古川清彦氏が、「これは彼の幼年時代の体験と美を神秘的な境地に迄探求するロマンティズムから発するのであらう」（「国語と国文学」昭和二十二年八月号伊良子清白評伝）と述べておられる。私はこの点について考える時、前節にも記したが、彼が三十三年の一月に、浜寺の鶴の家に於いて鏡花の幻覚について医学的に立論したということを想起せずにはいられない。鏡花の代表作「高野聖」は同年に発表されているし、ちょうど清白が編輯に参加した「明星」にも、当時、鏡花は頻繁に小説などを発表している。従つて清白が鏡花のローマンティックな神秘美に関心を寄せ、影響を受けたとしても不自然ではないと思う。ずつと後の作品であるが（三十六年）「旅行く人に」の才五・才六連を次に掲げておこう。そこか「高野聖」を連想するのは私だけであらうか。

天女泉に

下り立ちて
をがめ
小瓶洗ふも

目に入らむ

山蛭膚に

吸ひ入らば

谷に薬水

溢るべく

ただ断つておくべきは、古川氏も指摘されているように、彼の場合は、神秘的な美を好んだというよりもむしろ、絶えず永遠の美というものを追求していつたがゆえに、必然的に神秘性を有するようになったと見るべきではないかということである。

以上、「明星」との関係を述べるにはあまりに断片的な事柄を書き連ねたが、私はこれらのことから、清白が「明星」とのかかわりをもつたことが、彼にとつては、直接的な影響をもたらさなかつたにしろ、重要な意味をもつていたと思うのである。中央文壇との接触を殆んどいつてよいほどになかつた清白にとつて「明星」との接触は非常に短い期間であつたけれども、多くの新鮮な、広範囲な人や作品に触れる機会をつくつたといえる。それは何らかの意味で彼に発奮させるものを与えたといつてよい。そして「明星」を通過した後の彼は、急速に自己の詩風を確立していつたのである。